

ハクサンシャクナゲの山地植栽

中内武五郎 斎藤 晶 開本孝昭

はじめに

近年，庭木，盆栽などの花木ブームにのって山取りが行われているが，自然破壊がはなはだしく，減少の一途をたどっている。

今回山地植栽したエリモ町には，いわゆるエリモシャクナゲの群生地があり，これらも例にもれず，採取禁止区でも山取りされて地表がけずられ，植生が変りつつある箇所も見つけられる。

筆者らは数年前より，シャクナゲ，ツツジの実生増殖に関する試験を行いある程度の目途がついたのでこの養成苗を自然環境へもどした場合，どのような生育をするのか，また他の植生と共存してゆけるのかなどを調査するため山地植栽を計画した。この実行にあたり，道自然保護課，日高支庁，浦河営林署の御協力をいただいた事に対し心より感謝の意を表す。今後，さらに生育状況の観察をして行く予定であるが，植栽後3年を経過したので一応とりまとめ，中間報告したい。

エリモシャクナゲの形態と分布

一般にシャクナゲ類は本来の和名のほかに産地名をつけられているものが多く混乱する場合が多い。エリモシャクナゲもエリモ地域に産するというのでその名がついている。

本道に自生しているシャクナゲは高山地帯にあるキバナシャクナゲと，平地に生えているハクサンシャクナゲの2種類であるが後者については異論も多く大井氏は本道にある種をエゾシャクナゲとしてあげている。また，上原，奥山氏等は葉の裏面に微毛が密生しているかどうかによってハクサンシャクナゲとウラゲハクサンシャクナゲに分類している。

エリモシャクナゲもハクサンシャクナゲの1種である。さきに行った筆者らの調査では，エリモシャクナゲはほふく状に生育し草本と同じ位の高さで，色は灰褐色で肌があらう。また特徴として葉の大きさは他の地域のものより小さく円形に近い形をしている。葉柄も他地域のものより非常に短い。また他の地域のハクサンシャクナゲは，2年生の葉はその秋に脱落するものが多いが，エリモシャクナゲは2年生の葉は脱落が見られず，冬でも緑が濃く一般の花木栽培者から珍重されている。

この分布はエリモ岬から半径5 km 以内の強風特殊地帯が主体となっており，環境によってこのような形態になったものと推察される。

試験地の概況

試験地はエリモ岬からおおよそ 2.5km、標高 50m の高台にあり、南は太平洋に面し、周囲はゆるやかな丘陵をなしている気象変化のはげしいところである（図 - 1）。

その昔、高台はカシワ、低地はケヤマハンノキ、ヤナギ類を主林木とした広葉樹のわい生林であったが部落民が燃料として手近な立木を伐採したこと、また家畜等の過放牧で枯れたほかに明治 13～14 年にトノサマバツタの大群が飛来し、地床植物の大部分を食べつくした事などにより荒廃化が進んでいったと云われる。この地区は昭和 25 年道立自然公園に、昭和 36 年 7 月飛砂防備保安林に、昭和 39 年 4 月道立自然公園第 1 種特別地域に指定されて現在に至っている。

植生はガンコウラン、ヤマツツジ、ハマナス、ノコギリソウ、アザミ、キンスゲ、マイズルソウ、ミヤマアズマギク、ミヤコザサ、カヤ、イタドリ、セイヨウタンポポ、オオバコ、ヘラオオバコ、エゾカンゾウ、ナガボノシロワレモコウ等で木本、草本共に 60cm 以下の植生で占められている

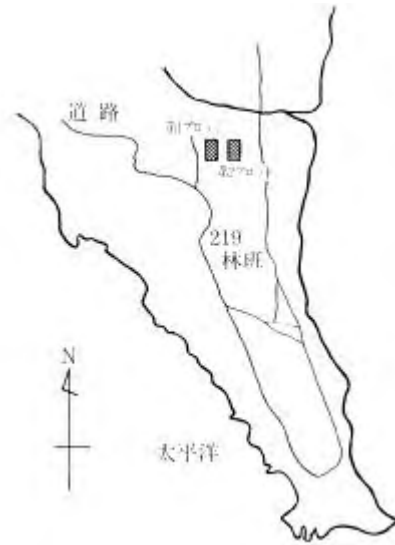


図 - 1 ハクサンシャクナゲ植栽
試験地（エリモ岬）

苗木および植栽方法

苗木は 1969 年秋、エリモ岬より営林署の許可をえて採取した種子を翌年 1 月当場の温室内で播種し、2 冬経過したものを使用した。山出し当年の冬期間も温室内においたので、5 月 20 日にジフィーポット（8×8cm）に植え替えを行った。ジフィーポットの用土は火山砂（1～2 mm）とピートモスを半々にしたものを用いた。苗木の大きさは 3～4cm 以上で葉は 3～5cm 位ひろがり 5 葉以上あるものの中から樹勢の強いもの 300 本を選んだ。



写真 - 1 植栽地の地形と植栽状況

1972 年 6 月 13 日、これらの植込みを行った。植込み箇所はこの中でも比較的風当たりが少なく条件のよいところである（写真 - 1）。植込みしたあとは人目につかないようにした。特に第 2 プロットは盗採されて表土が出ている箇所が多く（写真 - 2）、これらの箇所に重点的に植込んだ。植栽方法は、他の植生場所を破壊しないように一畝植えを行いおおよそ 3～4 列で 1 区あたり 150 本を植込み、2 区

を設定した。

植栽後の経過

1972年9月28日約3ヵ月経過したときに第1回目の調査をおこなった。第1プロットは生育もよく天然のものと区別がつけがたいように生育していた。また第2プロットは生育は悪くはないが一部盗採されていた。

第2回目の調査は1974年6月に行った。ジフィーポットもほとんど腐り天然のシャクナゲと全く区別できなく、苗木の大きさも7~8cm、葉も7~8枚になっていた(写真-3)。調査の結果は表-1のとおりである。

表-1 調査結果

項目	プロット	第1回目調査(本)	第2回目調査(本)
生育のよいもの	1	73	44
	2	30	19
普通のもの	1	8	5
	2	12	7
枯死	1	3	5
	2	21	26
不明	1	66	96
	2	87	98
計	1	150	150
	2	150	150

から考えると、ジフィーポットを使用することがよい方法だと思われる。

最後に、自然をそのままの状態でも永久に持続させることも大切ではあるが、破壊されたあとをよりよく復元していくことも自然保護の一策であるとする。

(樹芸樹木科)



写真-2 植栽直後の状態

第2プロットの盗採箇所への植栽(円内)



写真-3 植栽後2年目の生育状況

現植生に完全に同化している。

おわりに

エリモ岬のような気象変化の厳しいところでも養成苗で十分育つことがわかった。なお植栽適期をえらばないことや土壌条件